

ディスコグラフィー収録

ディスコグラフィー 【2019No.124】 (HP 掲載)

分類：MQA-CD

作曲家：A. ヴィヴァルディ

曲名：四季抜粋他

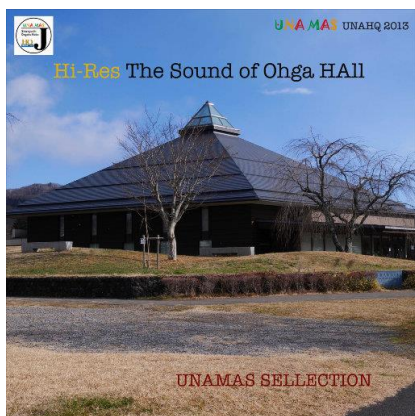
演奏：UNAMAS String Quartet

発売：OTTAVA

No. : OTVA-0020

概要：

[上新電機オーディオ試聴会報告\(2019.3.3\)](#)で紹介されたもので、The Sound of Ohga Hall Best Selection というタイトルにより軽井沢の大賀ホールで録音されたもののセレクションです。



【曲目】

1. UNAHQ 2005 「The Four Seasons Antonio Vivaldi」 より Concerto in E Major [La Primavera] op 8 - 1 RV
2. UNAHQ 2007 「J.S Bach The Art of Fugue BWV - 1080」 より Contrapunctus
3. UNAHQ 2007 「J.S Bach The Art of Fugue BWV - 1080」 より Contrapunctus
4. UNAHQ 2007 「J.S Bach The Art of Fugue BWV - 1080」 より Contrapunctus
5. UNAHQ 2007 「J.S Bach The Art of Fugue BWV - 1080」 より Contrapunctus
6. UNAHQ 2009 「Franz Schubert NO 14 in D minor Death and The Maiden」 より Allegro
7. UNAHQ 2010 「Dimensions ~Inspired by Bach. Debussy. Beethoven」 より Inspirations Beethoven Piano Sonata NO - 8 op
8. UNAHQ 2010 「Dimensions ~Inspired by Bach. Debussy. Beethoven」 より Green Sleeves

9. UNAHQ 1019 「In the Sprit of Blues」 より Georgia on My Mind

10. UNAHQ 2012 「P.I.Tschaikovsky op - 70 Souvenir de Florence」 より Allegro con Spirito

ネット上の紹介を下記に引用します。

「日本プロ音楽賞のハイレゾリューション(ハイレゾ)部門において2年連続受賞を果たした UNAMAS レーベルの、軽井沢大賀ホールで録音された6作品から聴きどころばかりを集めたベスト盤。ヴィヴァルディの『四季』で幕を開け、土屋洋一氏をストリングス・アレンジャーに迎えたシューベルトの名曲『弦楽四重奏曲 第14番「死と乙女」』は低域に特徴ある仕上がり。大賀ホールの空間を贅沢に使ったピアノソロなど、オーディオ的にもバラエティに富んだ10トラック。「It's a 軽井沢大賀ホール」とも言える当アルバムは MQA-CD のため、ハイレゾ作品としてもお楽しみいただけます。また、カラー8ページブックレットは、「大賀ホールと UNAMAS 録音」(麻倉怜士氏)、「大賀ホールの響きと音響設計について」(早川一郎氏/鹿島建設)、UNAMAS 主宰の Mick 沢口氏によるレコーディングノートなど、読み応えある内容です。」

本盤に興味をもったのは、旧来のマスターからの焼き直しの MQA-CD ではなく、最新録音からの MQA へのエンコードであり、フーガの技法など、コンサートで聴く機会があった曲が含まれていること、[上新の試聴会](#)では、システムの不調などもあって、MQA の本来のポテンシャルを発揮できていなかったことから、じっくり評価する機会を持ちたかったからです。

試聴は次のようなルートで行いました。

- 1)外付け CD ドライブから fidata 経由で再生し、Brooklyn DAC+に USB 入力
- 2)外付け CD ドライブから fidata にリップングし、fidata から Brooklyn DAC+に USB 入力
- 3)LHH1001 で再生し、Brooklyn DAC+にデジタル AES 入力
- 4)河口無線に持参し、[河口無線メディアアン Model218 試聴報告\(2019.3.3\)](#)および[河口無線カートリッジ試聴報告\(2019.3.14\)](#)と同じトランスポートと DA コンバーターで再生、但し、今回はアンプが HANIWA の HDSA01 に変更

試聴結果：

- 1)、2)、3)とも、Brooklyn DAC+の表示は MQA のランプが点灯し、176.4KHz24bit の表示になります。



音質的には、1)、2)、3)とも、上新電機のデモより、演出過剰のところ若干払しょくされ、よりクリアーになっていますが、四季、フーガの技法、死と乙女など、馴染みの曲は、これまで聴いてきた、アナログ盤、CD、演奏会などの経験などからすると、かなり違和感がある音です。1)、2)、3)の相対比較では、2)が相対的には一番よく、ついで1)、3) という順序であり、これまでの経験と一致します。なお、弦をネックに押えたり、離したりする音まで聴こえますので、かなり近接マイクで録っているものと推測できますが、うたい文句のような大賀ホールのホールトーンの良さは感じ取れず、上記の評には同意できないところがあります。Brooklyn DAC+には、MQA のデコード可否の ENABL/DISABL の切り替えがありますので、DISABL として 44.1KHz16bit での再生も行ってみましたが、緻密さが減少するものの、録音自体の印象は変わりません。4) については、The Sound of Ohga Hall Best Selection の MQA-CD の収録曲のなかから、四季、フーガの技法、死と乙女について、持参した下記の通常 CD と聴き比べてみました。

四季	PHOLIPS PHCP-9257 サルバトーレ・アッカルド他
フーガの技法	CHANNEL CLASIICS CCS SA 38316 レイチェル・ポッジャー／ブレコンバロック
死と乙女	WARNER CLASSICS WPCS-23065 アルバン・ベルグ四重奏団



MQA-CD の The Sound of Ohga Hall Best Selection 収録曲と対応する上記 CD の収録曲を比較試聴した結果、いずれも MQA-CD の方は、ところどころに強調感があってバランスが崩れているのに対し、CD の方が、より自然で、弦楽の細やかな表情も見えていました。

考察：

上新の試聴会では、本盤の試聴において、同行の M 氏はカクテルオーディオのパフォーマンスの問題を挙げられ、I 氏は担当者が、機器の操作に不案内ではないかという指摘をされ、さらにこれだけでは、MQA そのものまで否定的な印象を持たれたようですが、上記から判断すると、音源の選択も関係していたように思われます。

まとめ：

上新的試聴会では、システムの不調もさることながら、試聴 MQA-CD 盤の録音や製作そのものに由来した個性の強い、特殊な音源になっていることから、MQA の真価を知らしめる音源としては適切ではなかったものと考えられます。

以上